

# 「被災地の薪で被災者を温めた支援活動記録」が 第24回自治労文芸コンクールで入選しました

平成23年3月11日の東日本大震災津波直後から、私は岩手県職員として、滝沢村の産業文化センターに全国から集まる救済物資の仕分けと被災地への配送便への積み込み作業に追われていました。1日2交代で被災地別に必要な物品を仕訳し、トラックに積み込む作業はかなりきつい仕事でしたが、被災者の味わった苦痛の千分の一にもならないと自分に言い聞かせて体を動かしていました。

その間、県南広域振興局遠野農林振興センター林務課長の深澤光氏は、被災地の最前線を駆け回り、一刻も早く被災者に温かい物を食べさせてあげたい、風呂に入れてあげたいという一心から、鬼神のように行動し情報を発信し続けていたのです。彼自身も新幹線に乗車中に、福島駅で被災して数日間の避難所生活を余儀なくされ、その間全く暖かいものを食べることも、風呂にも入ることができなかつた経験から、被災者の目線で考えて行動しはじめていたのです。

彼は、岩手・木質バイオマス研究会のメンバーングリストに日誌のように活動記録を書き込み、助力を要請し続け、様々な方面からの協力を取り付けながら、プロジェクトを立ち上げて動いていたのです。最初は、調理兼簡易焚火ボイラー

の試作からはじめましたが、その後には県外のメーカーから提供された2台の薪ボイラーと漁業用の生簀(いけす)を風呂桶に利用して、仮設の入浴施設「吉里吉里国河童薪の湯」を設置することができたのです。さらに毎日交代で遠野から吉里吉里まで通い、薪を燃やしてお湯を貯め続けました。それで被災者は久しぶりに暖かいお風呂に入浴できるようになったのです。

私は、彼の活動を後方支援できずにいた負い目から、彼の活動記録を残すことを自分に課して、メンバーングリストへの彼の書き込みを基に、応募作品にまとめたところ入選することができました。しかし、本当は彼にこそ受賞の資格があるのです。(入選作は、12月には作品集として印刷されます)



「吉里吉里国河童薪の湯」と二台の薪ボイラー

林業技術センター

首席専門研究員兼研究部長

東野 正

019 (697) 1536